

聖書:第一列王記21章1～14節

説教:神はどこにおられるのか

はじめに

北イスラエルの七代目の王となったアハブは、あるとき北隣にあるアラムの国の王であるベン・ハダドによって二度にわたって攻め込まれてしまいます。当初は勝ち目のない闘いだっただのにもかかわらず、神のあわれみによって敵を押し返し、ベン・ハダドは白旗を掲げて降参をする。アハブは彼とあっさり和解をし、平和条約を結んでそのまま帰してしまいます。これをご覧になっていた神は預言者をアハブの所に遣わし、「あなたはベン・ハダドをさばくべきであったのに彼を逃してしまったので、ベン・ハダドの代わりにあなたをさばく」と告げます。厳しく聞こえた神のことばでした。でも、罪人して生まれた私たちがさばかれずに済んだのは、実は神がこう語ってくださったからでした。というのは、主イエスが私たちがさばきから逃れさせてくれて、その代わりに主がさばきを受けてくださった。そのようにつながる恵みのことばであったことを見てまいりました。

今日はその続きですが、すぐにおわかりのとおりにはひどい話がかかれてあります。数十年前のことですが、日本中がバブルに浮かれている時代があり、その頃さかんに「地上げ屋」ということばを耳にしました。お金になりそうな土地・不動産を手に入れるために、持ち主に嫌がらせをする。なかにはトラックが家に突っ込んだとか、その筋の人たちがやってきてさんざん脅かされたとか、いろいろな噂が飛び交いました。ここでイゼベルがやっていることは、それ以上のひどさです。このとき神はどこにおられたのか。このところのどこに神の恵みがあるのかを見てまいります。

1 イズレエル人ナボテ

1) 畑の売買交渉

あるときアハブはイズレエル人ナボテに次のような土地取引を提案します。2節。「おまえのぶどう畑を私に譲ってもらいたい。あれは私の宮殿のすぐ隣にあるので、私の野菜畑にしたいのだが。その代わりに、あれよりもっと良いぶどう畑を与えよう。もしおまえが良いと思うなら、それ相当の代価を銀で支払おう。」

アハブが提案した取引条件は誰が見てもかなり魅力的で、普通ならみな喜んで土地を手放すだろうと思うくらいです。

2) 「先祖のゆずりの地」

ところがナボテはきっぱりと断る。3節。「私の先祖のゆずりの地をあなたに譲るなど、主にかけてあり得ないことです。」

アハブはかなりよい条件を提示したので交渉には自信があったはずですが。ところが意外にもけんもほろろに断られてしまったことに腹を立て、布団を頭からかぶりふて寝をしてしまいます。これで話が終わればよかったのですが、ここから大きな問題が起きていきます。

2 アハブの妻イゼベルのしたこと

1) 王の名をかたり、偽証と殺人を行う

家に帰ってきた夫の様子がいつもと違うと気がついた妻のイゼベルは、いったい何があったのか尋ねます。アハブは、ナボテが自分にこう言ったので腹を立てているのだと答える。イゼベルはこれを聞いて、落ち込んでいる夫を叱咤激励し、万事後は私がうまくやって、あなたが欲しがっているナボテの畑を必ず手に入れてあげるからあなたは元気を出しなさいと言って、背中をどんとたたく。実に頼もしい妻ですが、やろうとしていることはなんともすごい。

イゼベルは三つのことを企てます。一つ目は、イスラエルの王であるアハブの名を語って手紙を書く。二つ目。ナボテを「神を王を呪った」という罪で告発し、二人のよこしまな者を証人に立てて偽証するようにしなさい。三つ目。石打ちにしてナボテを殺せ。

2) 律法を軽んじる時代

イゼベルのしていることはかなり極端かもしれませんが。しかし似たような事は意外に身近に起きている。まったく事実と違う情報をネットで流して平気で人を傷つけるということを最近聞くようになりました。あるいは、本名、住所、などの個人情報やネットですらして地域社会で生活できなくさせてしまうことも起きています。なにかを発言すると、「非国民は日本から出て行け」と声高に叫んで黙らせようとする。被害に遭った人たちは生活を奪われていくのに、やっている本人は自分の名を明かさず、ほとんど罪の意識がありません。何が良くて悪いことなのかの境目があいまいになりか

けています。イゼベルのしていることはそんなに悪いことではない、と言う人さえ出かねません。

そんな時代だからこそ、私たちは聖書に記されている善悪の基準としての律法を確認する必要があります。イゼベルのしていることを、モーセの十戒に照らしてみるとよくわかります。

イゼベルは「おまえは神と王を呪った」と言わせるよう手紙に書いていますが、十戒の三番目に、「あなたは、あなたの神、主の名をみだりに口にしてはならない」とあります。イゼベルは神を信じていないのに、自分の欲しいものを手に入れるために神の名前を勝手に使います。もっと言えば、神に立てられたイスラエルの王の名前も勝手に使う。神の名をみだりに口にしています。六番目の「殺してはならない」、九番目の「あなたの隣人について、偽りの証言をしてはならない」、十番目の「あなたの隣人の家を欲してはならない」、説明の必要はない。これらの律法にことごとく違反しています。

3 神

1) 正しい人が殺される

律法を持ち出すまでもなく、ここを読んでだけでも憤りを覚えるでしょう。なぜ憤るか。二つの理由があります。一つは、どうしてナボテは殺されなければならないのか。彼は何か悪いことをしたのか。いいえ、イゼベルも認めているように、彼の中には殺される理由はまったくない。ただ、アハブの欲望、イゼベルの欲望を満たすためにだけ、彼は殺される。こんな理不尽なことがあっていいのか。これが一つ目の憤りです。

二つ目は、神に関することです。正しい人が殺されようとしているのに、神は何もしないのか。どうして止めないのか。どうして、イゼベルがしようとしていることをそのままにされるのか。例えば御使いが現れて、ナボテを救うこともできるはずなのに、ナボテはイゼベルの罪に巻き込まれ、殺される。神は正しい者を助け出し、悪者をさばく方ではないのか。もし本当に神がいるのならば、正しい者が殺されないようにすべきではないのか。ナボテが殺されて終わりなら、私たちは神を信じる意味が本当にあるのか。そんな疑問にもつながっていきます。

2) さばき

もちろん、このような不正がまかり通っているのを神が黙ってご覧になっているわけではない。あるいはイゼベルの罪に対して、神は何もできないと諦

めているのでもない。むしろその反対で、アハブとイゼベルのしていることに強い関心があるからわざわざ聖書に詳しく記すのです。ただ強い関心があるというのではない。この後、神は具体的に動き出す。なにをするのか、そのことを少し先取りしてお話ししておきます。

このすぐ後、神は預言者エリヤをアハブの所に遣わし、アハブとイゼベルの罪を指摘し、「今わたしは、あなたにわざわいをもたらす」と述べるとともに、イゼベルについても、ナボテから奪い取ったイズレエルの土地で悲惨な死に方をすると預言をいたします。この預言は第二列王記9章のところでやがて実現することになります。神はどこまでも罪に対してあいまいなことはなさらない。厳しくさばきをおこなわれるところがこれでわかります。

3) もしナボテの栄誉といのちが回復されなければ

それはよいとしても、なお疑問が残ります。殺されたナボテはどうなるのか。これは犬死にではないか。これはなにもナボテのことに限りません。今、私たちが生きているこの世界に渦巻いている疑問です。子どもが親の虐待を受けて死んでいく。親は逮捕され、裁判を受けて法律に従ったさばきを受けるでしょう。でも亡くなった子どもが帰ってくるわけではありません。死んだ者を取り戻すことはだれにもできない。私たちが心の底から願っていることは、死んだ者、殺された者が、いつかその人の名誉がもう一度回復され、いのちが取り戻されることです。それがもしできないというのなら、死んでいった者たちの叫びは空しく消えていくだけ。結局、聖書に希望はないということになる。

4) 先祖のゆずりの地は絶対に取り上げられない

もちろんそんなはずはない。神が完全なさばきをなさると言うのなら、ナボテのように罪なくして殺された者の栄誉といのちを必ず取り戻すはずです。いったい、どこにそのような証拠があるのか。実はナボテ自身が語っている。3節。「私の先祖のゆずりの地をあなたに譲るなど、主にかけてあり得ないことです。」

日本の古い伝統にあるような「先祖代々の土地を守らなければ」という話とは違います。彼はこのことにこだわります。王の申し出を断ったら殺されるかも知れない。イゼベルのことがなくても、常識としてそれはあったはずです。でも彼は断固として断る。どうしてか。いのちをかけてでも守り通

さなければならぬ神の真実であると、ナボテが信じていたからではないですか。では、ナボテがこだわった先祖のゆずりの地とはなにか。単なる土地の話ではない。今の私たちにも深い関係があります。最後にそのことに触れておきます。

私たちは先ほど「主の祈り」で「御国が来ますように」と祈りました。私たちが神に願う最大の祈りと言ってもよい。御国とは神が私たちに相続として与えてくださるゆずりの地のことです。私たちは相続権を持っている。主の救いをいただいたとき、私たちは神の子とされたので、相続の権利が発生した。この権利は絶対に奪われることがない。ナボテは先祖のゆずりの地をほかの人に売ることなど絶対にできないと言い、そのためにいのちを捨てた。それと同じように、御国を相続する権利は誰にも奪われてはならない。そのために主ご自身がナボテのように偽証によって死罪の宣告を受けられ、十字架で死んで行かれました。誰が天の御国に迎えられるのでしょうか。死んだ者ですか。いいえ、生きている者が入るのです。ナボテも神によって栄誉を取り戻し、いのちをいただいてそこへ入ります。このことがあるから私たちは、たとえどんなことがあっても希望を失いません。

神はどこにおられるのか。この時代、多くの人々が叫んでいます。でも、神は決して忘れたのではない。神のひとり子である方がいのちを捨ててくださるほどに、私たちをあわれみ救い出そうとされている。私たちの目には悲惨な事件やニュースばかりしか見えませんが、世界はこのような神のあわれみの中に置かれている。さばきは完全に行われ、罪赦された者は必ずいのちをいただいて御国に迎えられていく。この希望は絶対に奪われることはない。私たちはこのような神の約束を信じて歩んでまいります。